

酋長カイレ

(コロンビア)

若い酋長のカイレは、川の近くの小さな村に、妻とふたりで住んでいました。ある日のこと、カイレは、森へ狩りに出かけました。カイレも妻も鹿の肉が大好きでした。

カイレが鹿を待つていると、しげみの中で何かが動きました。そこで、ねらいを定めて矢を放ちました。矢はみごと命中して、えものは地面にたおれました。ところが、しげみにかけよつて引きだしてみると、それは鹿ではなくて人間だったのです。

カイレはおどろきました。すると、死んだ男が口を開いていました。

「カイレ、おどろくことはない。たしかにおまえはおれを殺したが、わざとやつたんじやないことは分かっている。おれのいうとおりにしてくれたら、おまえをゆるしてやるう」「いつたい、何をしたらしいんです」

「おれの頭を切りとつて、家に持つてかえるのだ。胴体のほうは川に捨ててくれ」

カイレはいわれたとおり、死んだ男の頭を切りおとし、胴体は川にすてました。そして、頭をふくろに入れてかつぎ、家に向かいました。歩いていると、ふくろの中の頭がいいました。

「おれに外を見せてくれ」

カイレは、頭をふくろから出しました。すると頭は、

「よし、それじや矢をつがえて、あっちのほうに向けて放つんだ」といいました。カイレがいわれたほうへ矢を放つと、カイレには何も見えなかつたのに、矢はみごとに一頭の鹿に命中しました。カイレは鹿をかついで帰ろうとして、考えこんでしました。

(こいつをかついいだら、頭はどうやって運んだらいいんだろう)

すると、頭がいいました。

「おれはあとから転がつていく。さあ、先に行つてくれ」

カイレが歩きはじめると、頭はあとから転がつてついてきました。

家にもどると、妻はたいそうおどろきました。夫のあとから人の頭が転がつてきたのですから。カイレは、

「こわがらなくてもいいんだ。この頭は何も悪いことをしないから。ぼくの兄弟みたいなものだ」といました。

妻は鹿の肉を焼き、おかゆをこしらえました。カイレが頭に、「あなたも食べますか」とたずねると、頭はいいました。

「おれが食べる前に、おまえの女房に肉をかんでもらつてくれ。おれの歯はもうだめになつているんだ。おかゆはそのままもらおう」

こうして、カイレと妻は、死人の頭といっしょに暮らすことになりました。カイレはいつも死人の頭といっしょに狩りに出かけ、たくさんのおものをとりました。

二週間たつと、死人の頭がカイレにいいました。
「おれは少しのあいだ出かけなくてはならない。やることがあるのだ。おれを森へ運んでいって、おまえがおれを殺したしげみに置いてくれ。そして、一週間したらまたむかえにきてほしいのだ」

カイレは、死人の頭を抱きかかえると、森へ運んでいってしげみに置きました。
それからの一週間というものの、カイレは、狩りに行つても魚をとりに行つても、一匹のえものにありつけませんでした。ところが、一週間たつてまた死人の頭が小屋にもどつてくると、どんな狩人もかなわないほどにたくさんのおものがとれました。

こうして、ひと月ごとに死人の頭を森に運び、一週間するとむかえにいくという日々が続きました。

やがて、カイレにかわいい男の子が生まれました。死人の頭は、狩りに行かないときにはいつも子どもの側そばにいました。しばらくすると、こんどは女の子が生まれました。

ある日のこと、カイレは川に水浴あびに出かけ、妻は小屋の中しごとで仕事をしていました。子どもたちは、草原くさはらで遊あそんでいましたが、そこへ毒蛇どくへびがはいよってきて、子どもたちにかみつこうとしました。死人の頭は、すぐに気がついて、蛇に向かつてころころと転がつていき、蛇と戦たたかいはじめました。

しばらくして、川からもどってきたカイレは、子どもたちの側に死んだ毒蛇を見つけました。蛇は頭がかみくだかれていきました。見ると、死人の頭もぐつたりしています。死人の頭は、

「蛇のやつにかまれてしまつた。毒がすっかり回つたらしい。いいか、よく聞いて、おれ

のいうとおりにするんだ」といいました。カイレはおどろき、「分かった」と答えました。

「では、おれを焼いてすっかり灰にしてしまつてくれ。灰の中に青い石があるから、そいつを取りだしておまえの娘の首にかけて、お守りにするのだ。それから灰をふくろにつめて森に運び、おまえがおれを殺したしげみにうめてくれ」

カイレはいわれたとおり、死人の頭を焼いて灰にしました。すると、灰の中に青い石があつたので、娘の首にかけてお守りにしました。それから、灰を森のしげみに持つていつてうめました。すると、灰をうめた所から、やしの木が生えてきました。

週にいちど、やしの木の下に行くと、カイレは必ずえものにありつけました。ただ、ひと月のうち一週間だけは何もとれませんでした。

それから何年かたちました。娘は年頃になり、たくさんの若者が結婚を申し込みにやって来ました。そしてやがて、ある酋長の息子と結婚することになりました。

結婚式の夜、若者が娘の側に横になろうとすると、やみの中に、青く光る物がありました。

「首にかけているその青い物はなんだい」と、若者はたずねました。娘が、「お守りの石よ」と答えると、若者は、

「いや、石なんかじやない。そいつは魔法の目だ」といって、おそれで逃げだしました。それからしばらくして、またひとりの若者がやつて来て、娘と結婚しました。こんどもまた、結婚式のあと、若者が娘の側に横になろうとすると、やみの中に、青く光る物がありました。

「首にかけているのはなんだい」

「お守りの石よ」

「いや、石なんかじやない。そいつは魔法の目だ。おこつたように、ぼくをじつと見つめている」

若者はそういうて、逃げだしました。

いまや、村じゅうの若者が娘をおそれました。もうだれも、娘と結婚しようと思う者はいなくなりました。

何か月かすぎたある日のこと。かたほうの目が不自由な若者が村にやつて来ました。

その日は、カイレの家では、ちょうどえもののとれない週に当たっていました。若者はけものの肉や魚を持つてやつて来て、カイレの側にすわっていました。

「あなたの娘さんが気にいりました」

「そうか、でも、娘には悪い魔法がかかっていて、だれも結婚しようとしないのだ」

「かまいません。わたしは、娘さんと結婚します」

まもなく、結婚式が行われました。その夜、若者は娘の側に横になつて、いいました。

「君の石を見せてくれないか」

娘は、青い石を差し出しました。若者は石を受けとると、目のないほうのくぼみにはめました。

つぎの日、夜が明けると、カイレは、妻にいました。

「あの若者は、ゆうべ、逃げださなかつたな。村のやつらとはくらべものにならない、りっぱな若者だ」

そのとき、娘の部屋から若者が出てきました。その顔には、ちゃんとふたつ、目がありました。ひとつは青い目でした。若者は、

「お父さん、これからはわたしが狩りに行きます。お父さんはもう働くからなくてもいいのです。ただ、月にいちどだけ、わたしはわたしの一族の所にもどらなくてはなりません。そのときは、この川で魚をとつてください。まちがいなく、たくさんの魚がとれるはずですから」といいました。

そして、ほんとうに、そのとおりになりました。

* 備長 インディアンなどの部族の長。指導者。
ぶぞく しどうしゃ

* 狩人 鳥やけものをとつて暮らしている人。猟師。
りょうし

出典 『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁再話／語りの森